



ゆっくりと、でも確実に、一歩ずつ！

今年の夏の暑さはいつまで続くのだろうかと思うような暑さの中で、2学期の始業式を迎えます。平素は、聖母の小さな学校の教育に格別のご理解、ご協力をいただき、深く感謝申し上げます。在籍の生徒たちも、夏休みの登校日には、リズムを崩すことなく生活している様子を見せてくれました。2学期も1日1日の活動を丁寧に行いながら、社会参加ができる力をつけてゆきたいと思います。不登校になって、家から出にくくなって、引きこもりがちになった子どもたちが、このように生活リズムを少しずつ整え、混乱した気持ち、苦しいけど何が苦しいのか分からないような閉塞感などを持ちながらも外へ出られるようになるのは大きなことです。この力を基礎にして、2学期を作り上げていきたいと思えます。

子どもたちが不登校になり、人と会わなくなり、外へ出られなくなり、時間と共にその傾向が強くなる…保護者も子どもの現実を見ることができない、まして、受け入れるということなど方法もわからない（受け入れることと承知することは違います）…保護者も、この子と共に歩む方向が見えず、苦しくて仕方がない…子どもはますます動かない…闇を抱えて孤立してゆきます。誰かが動かそうとしても、本人も保護者も、また周りの大人も、だれも動けないことがよくあります。

子どもであっても、大人であっても、人間であれば「差し当ってそうってしまった困難な状態」に陥る（出会う）ことがあります。そんな時、まず大人が、自身のことも含めて現実をじっと見つめてみる…子どもの不登校を保護者も教師もじっと見つめてみる…教師は、子どもや保護者に何か意味あること（援助、又は教育）をしようというのではなく、子どもの現実をじっと見つめてみる…そのことを続けていると、自分自身について新たな気づきがあり、教師自身が自身の深い所につながります。これは人間としての教師の喜びになります。これは、不登校を他人事ではなく、教師自身が体験することになり、ここから知恵が生まれます。また、それを感じた子どもも保護者も、先生が自分を変えようという力としてではなく、人として自分の隣にいてくれるという安心を感じるのではないのでしょうか。

不登校は、人と人がつながって、初めて方向性を持って動き出します。子どもたちは人とつながり、共に学ぶことを望んでいます。夏休みにある学校で、そんな教員研修をいたしました。先生方があきらめずに子どもたちを忘れないで向き合い続けてくださる一助になれば、うれしいです。

希望をもって子どもたちと教育活動に励みます。よろしくお願いいたします。

< 2学期お世話になる先生方 >

陶芸 (高井 晴美 先生)	体育 (渡邊 弘 先生)	華道 (山中 知昌 先生)
音楽 (北浦 弘治 先生)	数学 (江宮 文夫 先生)	社会・校外学習 (山下 正 先生)
ウズベキスタン文化 (アシルベク先生)		保健学習 (城永 千佳代 先生)
行事 (大久保 喜基 先生・笠原 昌明 先生)		

< 2学期の主な行事 >

9月中旬	釣り大会	11月23日 (祝) 親子バス遠足「歴史学習」
10月14日 (土)	スポーツフェスタ 2023 (体育祭)	12月2日 (土) 親子料理教室
10月下旬	お楽しみ遠足	「ウズベキスタン料理」